

明日への伝言

ワイナリー立ち上げの思いや、ワインと食を通じた観光の取り組みについて、代表取締役の毛利親房さんにお話を伺いました。



▲南三陸で行われたテロワージュでは、カキの養殖や養殖棚の下で海中熟成させたワインについて、船の上で説明しました

被災地にワインと食で活気を

震災当時、建築設計事務所勤務していた毛利さん。「以前から仕事で携わっていた女川で、震災後に見た壮絶な光景は今も忘れられません。何とかして復興しなければならぬと強く思いました」と振り返ります。

▲収穫間近のブドウ。畑では約7,000本にも及ぶブドウを栽培しています

震災前から自治体の建物の設計を行っていた縁で、自治体の復興計画を策定する会議に参加。県内唯一のワイナリーが津波で被災し、ワイン産業が途絶えてしまったことや、農家や漁師が風評被害などで販路に苦慮していることを知りました。「宮城にワイン産業を復活させたいという思いに加え、海外のワイン産地では地域の食文化と結び付いて世界中から観光客が訪れていると知り、ワインと食で宮城県の農林水産品をPRし、にぎわいを生み出してはと提案しました」。しかし当時の自治体は復旧など目の前の課題が山積み。「それならば民間でやろうと、ブドウ栽培もワイン作りも全く知識が無

「みんなで一緒に」という思い

の感動をもっと多くの人と共有したいと思いました」と話します。当初はワインだけ、県内だけで思っていました。世界にこの素晴らしい酒造り文化を伝えたいと、日本酒の酒蔵やウイスキー工場なども連携し、さらに東北各地にもテロワージュを広めようと取り組んでいます。「業種や県域を越えてつながり、みんなで頑張ろうと思えるのは、震災を経験したからこそ。連携することでさまざまなテロワージュが生まれ、東北全体が盛り上がり、次はテロワージュに参加した人が『次はこの地域に行こう』と東北を周遊し、3泊も4泊もしてもらえるようになるとうれしいですね」。

ワイナリーの開業後、毛利さんは「テロワージュ」と名付けたイベントを始めました。テロワージュとは、フランス語で気候・風土や人の営みを意味する「テロワール」と、料理とお酒のペアリングを表す「マリアージュ」を掛け合わせて作った言葉。「人と食と風景と文化をつなぐ」をコンセプトに、参加者が漁師や農家など生産者のもとに赴き、生産現場を直接見たり思いを聞いたりしてからワインや食事を楽しむという会を定期的に開催しています。「食材の背景や生産者を知った上での食事は格別です。おいしいと感激して涙を浮かべるお客さんもいて、それは生産者にとってもうれしいこと。こ

今後は、地元の陶芸やガラス細工の作家と共同での商品開発などにも取り組みたいという毛利さん。「震災当時やりたかったと感じていました。ようやく動き始めたと感じています。次の10年はこれを根付かせたい。コロナ禍で大変な状況ですが、良いブドウを育てて良いワインを作ること、を大前提に、みんなで力を合わせてこの取り組みを広げ、観光地としての東北の魅力を発信していきたいです」と、希望に満ちた表情で語ってくれました。



「発行」 仙台市総務局広報課 ☎022・214・1150 FAX022・211・1921 som001020@city.sendai.jp 〒980-8671 仙台市青葉区国分町3-7-1

